

基礎看護学実習Ⅱ前後における看護学生のレジリエンスの変化 ～二次元レジリエンス要因尺度（BRS）を用いて～

久島 萌 吉岡睦世 窪川理英 中溝道子 溝口孝美 平尾眞智子

健康科学大学 看護学部 看護学科

Changes in the resilience among nursing students before and after
Basic Nursing Practice II training
～ Using the Bidimensional Resilience Scale (BRS) ～

KUSHIMA Megumi, YOSHIOKA Mutsuyo, KUBOKAWA Rie,
NAKAMIZO Michiko, MIZOGUCHI Takami, HIRAO Machiko

要 旨

【目的】看護学生のレジリエンス向上への示唆を得ることを目的に、実習そのものがレジリエンスの変化にどのように影響するのかを明らかにするため、基礎看護学実習Ⅱ前後における看護学生のレジリエンスの変化を二次元レジリエンス要因尺度を用いて検討した。

【方法】基礎看護学実習Ⅱを行ったA大学看護学部2年生(86名)を対象に、実習前後に自記式アンケート調査を実施した。分析は、実習前後の2群間における平均差の検定、自尊心との相関関係を分析した。また、自尊心の高低に群分けし同様に相関関係を分析した。

【結果】研究対象者のレジリエンスは実習前後ともに尺度中央値よりも高かった。【二次元総合レジリエンス】($t=-1.52$, $p=0.133$), 【資質的要因】($t=-1.83$, $p=0.070$), 【獲得的要因】($t=-0.30$, $p=0.762$)において、実習前後の平均値に統計学的に有意な差は認められなかった。

【考察】実習前後ともにレジリエンス得点が高いことから、主観的評価となるレジリエンスに対し、自己認識や自己評価を十分に行えていない可能性が考えられる。個々の学生がどのようなストレスや困難な状況を体験しているのか、それによりレジリエンスの変化にどのように影響しているのか検証し、レジリエンスを高める教育指導的関わりについて模索していく必要がある。

キーワード：基礎看護学実習Ⅱ，看護学生，レジリエンス

I. はじめに

今日の看護分野は、高度な医療の一翼を担うとともに、保健や福祉など幅広い領域に広がり、さらに様々な生活を俯瞰的に考察できる公衆衛生の視点も必要とされている¹⁾。そのため、専門職として実践能力が求められる看護においては、看護基礎教育から学生の主体的な学びが必要である。さらに、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ実践へ適用する能力を習得するにあた

り、看護臨地実習は重要な位置づけとなっている¹⁾。一方、看護臨地実習は身体的疲労や精神的緊張が高くストレスフルな状況であり、知識・技術の準備不足や他者との交流がストレスに大きく影響していると報告されている^{2, 3, 4)}。

近年ストレスや困難な状況を乗り越える力としてレジリエンスが注目されている^{5, 6)}。レジリエンスという概念は1950年代から発達精神病理学分野の研究を通して注目されるようになった。

「resilience」の語源はラテン語で「跳ね返る」を意味する「resilire」「resilio」と言われている⁷⁾。レジリエンスの概念に明確な定義はなく、三宅(2010)によると、レジリエンスの概念を初めに示したRutter(1985)は「深刻な危険性にもかかわらず、適応的な機能を維持しようとする現象」と定義し、Wagnild&Young(1993)は「ストレスの負の効果を和らげ、適応を促進させる個人の特性」、Werner(1993)は「逆境や障害に直面してもそれを糧としてコンピテンスを高め成長・成熟する能力や心理的特性」、Grotberg(2003)は「逆境に直面した時にそれを克服し、その経験によって、強化される場合や変容される人が持つ適応力である」と定義をまとめている⁸⁾。このように、レジリエンスの概念定義は研究者によって違いはあるものの困難に直面した際の自己の内面的変化を表していることでは共通している。ただし、ストレス・コーピングや自尊心とは異なり、立ち直る力や過程、結果とされている⁹⁾。ストレス・コーピングはストレス反応を抑制する力・方略をもってのことであるのに対し、レジリエンスはストレス状況下で一時的に傷つきながらもそこから立ち直る過程や結果を指している点で異なっていると言われている⁹⁾。

看護学分野においても2000年代からレジリエンスに関する研究が行われるようになった¹⁰⁾。看護学実習における学生のレジリエンスについての概念分析を行った隅田(2016)によると、看護学実習における学生のレジリエンスとは、「実習で生じるストレスから回復する力であり、学生が潜在的に持っている力」と定義している¹¹⁾。今回、医中誌webを用いて、「看護」AND「臨地実習」AND「レジリエンス」を原著論文に限定して検索した結果、21件の文献が見つかった(2019年4月1日)。さらに、最新の5年分に限定すると14件の文献となっていた(2019年4月1日)。また、最も古い文献でも2010年となっており、看護基礎教育においてレジリエンスに関する研究の歴史はまだ浅い。看護基礎教育の中でも重要な位置づけとなっている臨地実習における学生のレジリエンスを理解し育むことにより、就労後も高いレジ

リエンスを備え、様々な困難を乗り越え自己の発展を遂げることができる人材へと成長していくことが期待できる。特に、臨地実習の中でも専門的・実践的な実習内容となる各論実習を控え、また初めて一連の看護過程の実践を行う基礎看護学実習Ⅱにおける学生のレジリエンスは重要であると考ええる。

先行研究において山岸ら(2010)や川上ら(2011)は、実習前後における看護学生のレジリエンス得点を比較し、実習後レジリエンスが上昇する傾向が認められたことを報告しているが^{5) 12)}、基礎看護学実習のレジリエンスに関する文献は2件と少なく、それぞれ異なる尺度が用いられている。また、一般大学生や看護学生を対象としたレジリエンスに関する研究において、レジリエンスは自尊心との関連が認められ、自尊心を高めることによりレジリエンスを高める可能性があることが報告されている^{5) 13) 14)}。このことから看護学生のレジリエンスを検討する上で自尊心についても考慮していく必要があり、ストレスや困難な状況においても自己を肯定的に捉えることは、自己の発展を遂げる上でも非常に重要であると考ええる。

そこで、本研究では看護学生のレジリエンス向上への示唆を得ることを目的に、実習そのものがレジリエンスの変化にどのように影響するのかを明らかにするため、基礎看護学実習Ⅱ前後における看護学生のレジリエンスの変化を二次元要因尺度を用いて検討した。

Ⅱ. 方法

1. 研究デザイン

横断研究

2. 研究対象

基礎看護学実習Ⅱを行ったA大学看護学部2年生(86名)

3. 調査方法

1) 調査期間

レジリエンス変化を捉えるにあたり、先行研究において調査時期についてはこれまで言及されてきていない。そのため、本研究では実習前の第1回目調査を看護学生が実習という困難な状

況を目前に控えた最終オリエンテーション終了後の6月後半に実施した。また、実習後の第2回目調査の時期については、実習終了による達成感がバイアスとなる可能性があるため、実習終了直後を回避し最終レポート提出後から約1週間後の7月後半に調査を実施した。

2) 調査項目

(1) レジリエンス尺度

基礎看護学実習Ⅱにおける看護学生のレジリエンス向上への示唆を得ることを目的に、平野ら(2010)の開発した「二次元レジリエンス要因尺度 (Bidimensional Resilience Scale, 以下BRSとする)」を使用した。この尺度は、パーソナリティ研究分野の視点から、レジリエンス要因を資質的な性質の強い要因【資質的要因】と獲得的な性質の強い要因【獲得的要因】を分けて捉えることで、レジリエンスを後天的に高める方法を考えるための示唆を得ることを目的に開発された¹⁵⁾¹⁶⁾。この尺度の構成は、【資質的要因】と【獲得的要因】からなり、【資質的要因】として「楽観性」「統制力」「社交性」「行動力」、【獲得的要因】として「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」の7因子から構成されている。適用範囲は中学生以上となっており、信頼性・妥当性も認められている。なお、本研究は平野ら(2010)の尺度使用マニュアルに準じ、5件法で求めることとした。

(2) 自尊心尺度

これまで自尊心に関し多くの先行研究で用いられ、信頼性と妥当性が検証されたRosenberg(1965)の「Self Esteem Scale」10項目を使用した。なお、基礎看護学実習前後における学生のレジリエンスの変化を検討した山岸ら(2010)と同じく、山本ら(1982)によって日本語訳された「自尊心尺度」の10項目を使用し、4件法で求めることとした⁵⁾¹⁷⁾。なお、山本ら(1982)の日本語版尺度においても信頼性と妥当性が認められている¹⁸⁾。

4. 分析方法

2019年7月実施の基礎看護学実習Ⅱ前後におけるレジリエンス(【二次元総合レジリエンス】【資質的要因】【獲得的要因】)および自尊心を得点化し、平均値、標準偏差、中央値等を算出した。また、実習前後の2群間における標本の平均差を検定した(対応のあるt検定)。さらに、実習前後における自尊心とレジリエンス(【二次元総合レジリエンス】【資質的要因】【獲得的要因】)との相関関係を分析した。さらに、自尊心の高低による影響を考慮するため自尊心尺度中央値でカットオフし、中央値よりも高い得点群を「高群」、中央値よりも低い得点群を「低群」とし、レジリエンス(【二次元総合レジリエンス】【資質的要因】【獲得的要因】)との相関関係を分析した。なお、統計ソフトはSPSS Statistics ver.25を使用して分析した。

5. 倫理的配慮

研究対象者へは第1回目および第2回目の両日において、研究概要に関する文書の配布(研究テーマ、研究者、調査の概要、倫理的配慮、調査に関する問い合わせ先等)およびスライドを用いた口頭での説明を行った。その際に、調査への参加は自由意志であること、また調査に参加しない場合においても不利益は生じないことを伝え、調査票の提出をもって参加に同意が得られたものとした。さらに、この調査は研究目的以外では使用せず、調査における結果については学会や論文にて公表する可能性があることを伝えた。

また、実習前後の2回の調査が行われることに際し、個人が特定されないようあらかじめ暗号化した番号を記した調査票(第1回目調査票、第2回目調査票)を初回の調査時にランダムに配布した。第1回目調査票の回収は、研究者が目視できないよう調査を実施した会場外に鍵付きの提出箱を設け回収した。なお、第2回目調査までに期間があくため第2回目調査票も回収することとした。第2回目調査票の回収に関しては、研究対象者自身で第2回目調査票を封筒に入れ糊付けし、封筒へ名前を記載してもらい調査票を回収した。

これにより、第2回目調査時に暗号化した番号と同じ研究対象者へ配布でき、かつ研究対象者と暗号化した番号との一致を研究者が特定できない条件とした。第1回目調査と同様に、回収は研究者が目視できないよう調査を実施した会場外に鍵付きの提出箱を設け回収した。

尺度の使用に関し、BRSは出典の明記にて自由に使用が可能であり尺度使用マニュアルに則り調査および分析を実施した。自尊感情尺度は原著者及び翻訳者死去のため著作権は設定されていないが、翻訳通りの内容で調査および分析を実施した。

本研究は健康科学大学倫理審査委員会の承認を得て実施している(承認日令和元年6月26日、承認番号R1-003号)。

6. 用語の操作的定義

本研究では、レジリエンスを「実習で生じるストレスや困難な状況から回復する力」とした。また、【資質的要因】および【獲得的要因】を総合

した得点を【二次元総合レジリエンス】とした。

Ⅲ. 結果

1. 研究対象者(図1)

調査対象者86名に調査票を配布し、実習開始前の第1回目調査票の回収は、84部(回収率97.7%)であった。また、第1回目調査で回答のなかった2名を除外した実習終了後の第2回目調査票の回収は、83部(回収率96.5%)であった。

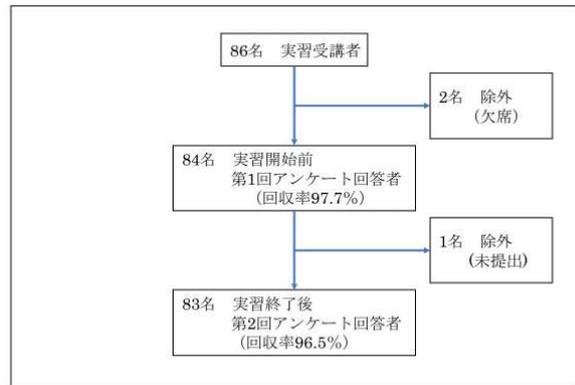


図1. 研究参加者

表1. レジリエンス得点および自尊感情得点

	尺度	実習前(n=84)							
		得点範囲	中央値	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	最小値	最大値
	二次元総合レジリエンス	21 ~ 105	63	70.9	10.7	69.5	69.0	51.0	99.0
レジリエンス	資質的要因	12 ~ 60	36	39.9	7.6	39.0	35.0	25.0	58.0
	楽観性	3 ~ 15	6	10.7	2.4	11.0	11.0	5.0	15.0
	統制力	3 ~ 15	6	9.9	2.4	10.0	11.0	4.0	15.0
	社交性	3 ~ 15	6	9.2	3.1	9.0	7.0	3.0	15.0
	行動力	3 ~ 15	6	10.2	2.6	11.0	12.0	4.0	15.0
	獲得的要因	9 ~ 45	27	31.0	4.9	30.5	28.0	21.0	45.0
	問題解決思考	3 ~ 15	6	10.0	2.4	10.0	8.0	5.0	15.0
	自己理解	3 ~ 15	6	9.9	2.3	10.0	10.0	4.0	15.0
	他者心理の理解	3 ~ 15	6	11.2	2.2	11.0	12.0	6.0	15.0
自尊心		10 ~ 40	25	23.1	4.6	23.0	25.0	14.0	36.0

2. レジリエンス得点および自尊心得点(表1)

1) 実習前

【二次元総合レジリエンス】の平均値(70.9点)は尺度中央値よりも高く、得点のばらつき(標準偏差10.7点)も大きかった。【資質的要因】の平均値(39.9点)、【獲得的要因】の平均値(31.0点)においてもそれぞれ尺度中央値よりも高く、【獲得的要因】(標準偏差4.9点)に比べ【資質的要因】(標準偏差7.6点)において得点のばらつきが大きかった。一方、自尊心得点の平均値(23.1点)は、尺度中央値よりも低かった。

2) 実習後

【二次元総合レジリエンス】の平均値(72.2点)は実習前に比べわずかに上昇し、得点のばらつき(標準偏差11.0点)については実習前同様に大きかった。【資質的要因】における平均値(41.1)、【獲得的要因】における平均値(31.1点)においても実習前に比べわずかに平均値は上昇し、実習前同様に【獲得的要因】(4.8点)

に比べ【資質的要因】(7.4点)において得点のばらつきが大きかった。一方、自尊心得点の平均値(23.1点)は実習前と同値であった。

3. 実習前後における平均差(表2)

1) レジリエンスの平均得点差

実習前後の【二次元総合レジリエンス】において対応のあるt検定の結果、実習前後の平均値に統計学的に有意な差は認められなかった($t=-1.519$, $p=0.133$)。また、【資質的要因】(t 値 $=-1.834$, $p=0.070$)および【獲得的要因】(t 値 $=-0.304$, $p=0.762$)においても、実習前後の平均値に統計学的に有意な差は認められなかった。

2) 自尊心の平均得点差

実習前後の自尊心得点において対応のあるt検定の結果、実習前後の平均値に統計学的に有意な差は認められなかった($p=0.879$)。

実習後(n=83)					
平均値	標準偏差	中央値	最頻値	最小値	最大値
72.2	11.0	73.0	68.0	37.0	94.0
41.1	7.4	41.0	41.0	18.0	59.0
10.8	2.4	11.0	12.0	4.0	15.0
10.1	2.3	10.0	11.0	4.0	15.0
9.7	2.9	10.0	7.0	3.0	15.0
10.5	2.4	11.0	11.0	3.0	15.0
31.1	4.8	31.0	31.0	18.0	44.0
10.1	2.2	10.0	12.0	5.0	15.0
10.0	1.9	10.0	9.0	5.0	15.0
11.0	1.9	11.0	12.0	5.0	15.0
23.1	5.1	23.0	21.0	10.0	39.0

表2. 実習前後における得点差

		平均値	t 値	95%信頼区間		p 値
				下限	上限	
						n=83
レジリエンス	二次元総合レジリエンス	-1.2	-1.52	-2.839	0.381	0.133
	資質的要因	-1.1	-1.83	-2.286	0.093	0.070
	楽観性	-0.2	-0.71	-0.690	0.329	0.482
	統制力	-0.2	-1.02	-0.567	0.182	0.309
	社交性	-0.4	-2.01	-0.791	-0.004	0.048
	行動力	-0.3	-1.44	-0.774	0.123	0.153
	獲得的要因	-0.1	-0.30	-1.000	0.735	0.762
	問題解決思考	-0.2	-0.83	-0.694	0.284	0.407
	自己理解	-0.2	-1.03	-0.601	0.191	0.306
	他者心理の理解	0.3	1.33	-0.138	0.692	0.188
自尊心		0.1	0.15	-0.727	0.848	0.879
対応のある T 検定						

表3. 自尊心とレジリエンスとの相関

		自尊心			
		実習前(n=84)		実習後(n=83)	
		r	p 値	r	p 値
レジリエンス	二次元総合レジリエンス	0.37	< 0.001	0.39	< 0.001
	資質的要因	0.39	< 0.001	0.39	< 0.001
	楽観性	0.43	< 0.001	0.33	0.003
	統制力	0.17	0.120	0.28	0.010
	社交性	0.30	0.006	0.32	0.003
	行動力	0.23	0.035	0.23	0.039
	獲得的要因	0.21	0.057	0.29	0.008
	問題解決思考	0.16	0.149	0.23	0.033
	自己理解	0.13	0.234	0.14	0.193
	他者心理の理解	0.16	0.147	0.32	0.003

Pearson の積率相関係数

4. 自尊心とレジリエンスとの相関(表3, 表4)

1) 実習前

自尊心と【二次元総合レジリエンス】との相関について Pearson の積率相関係数を求めた結果, 弱い相関であるが統計学的にも有意に自尊心が高くなるほど【二次元総合レジリエンス】が高くなる相関関係が認められた($r = 0.37, p < 0.001$)。また, 自尊心と【資質的要因】についても同様に相関関係が認められたが($r = 0.39, p < 0.001$), 自尊心と【獲得的要因】については相関関係が認められなかった($r = 0.21, p =$

0.057)。

さらに, 自尊心の高低で群分けし分析したところ, 自尊心「高群」において統計学的にも有意に【資質的要因】が高くなる相関関係が認められた($r = 0.29, p = 0.021$)。一方, 自尊心「低群」においては【資質的要因】との相関関係は認められなかった($r = 0.30, p = 0.168$)。また, 自尊心「高群」と【獲得的要因】との相関($r = 0.15, p = 0.260$), 自尊心「低群」と【獲得的要因】との相関($r = 0.00, p = 0.999$)については相関関係は認められなかった。

表4. 自尊心高低別レジリエンスとの相関

		自尊心							
		実習前(n=83)				実習後(n=83)			
		高群 (n=61)		低群 (n=22)		高群 (n=68)		低群 (n=15)	
		r	p 値	r	p 値	r	p 値	r	p 値
レジリエンス	二次元総合レジリエンス	0.28	0.030	0.21	0.359	0.25	0.044	0.18	0.519
	資質的要因	0.29	0.021	0.30	0.168	0.27	0.029	0.16	0.572
	楽観性	0.11	0.380	-0.12	0.596	0.10	0.395	0.11	0.689
	統制力	0.35	0.005	0.39	0.073	0.29	0.017	-0.04	0.899
	社交性	0.09	0.477	-0.09	0.689	0.08	0.522	0.33	0.223
	行動力	0.19	0.131	0.15	0.507	0.20	0.094	0.26	0.346
	獲得的要因	0.15	0.260	0.00	0.999	0.09	0.476	-0.08	0.783
	問題解決思考	0.10	0.425	-0.11	0.635	0.04	0.752	0.01	0.971
	自己理解	0.08	0.535	-0.30	0.181	0.01	0.924	0.03	0.905
	他者心理の理解	0.05	0.713	0.15	0.520	0.20	0.100	0.15	0.589

Pearson の積率相関係数

実習前後で一致したデータを用いて分析

表5. 今回の実習中に大変だった（辛かった）体験

n=82		
	n	%
なし	16	19.5
あり	66	80.5

2) 実習後

自尊心と【二次元総合レジリエンス】との相関については、相関は弱いが高くなるほど統計学的にも有意に【二次元総合レジリエンス】が高くなる相関関係が認められた($r=0.39, p<0.001$)。また、自尊心と【資質的要因】との相関($r=0.39, p<0.001$)、自尊心と【獲得的要因】との相関($r=0.29, p=0.008$)についても、いずれも相関は弱いが高くなるほど有意に自尊心が高いほど【資質的要因】が高くなる相関関係が認められた。

さらに、自尊心の高低で群分けし分析したところ、自尊心「高群」において統計学的にも有意に【資質的要因】が高くなる相関関係が認められた($r=0.27, p=0.029$)。一方、自尊心「低群」においては【資質的要因】との相関関係は認められなかった($r=0.16, p=0.572$)。また、

自尊心「高群」と【獲得的要因】との相関($r=0.09, p=0.476$)、自尊心「低群」と【獲得的要因】との相関($r=-0.08, p=0.783$)について相関関係は認められなかった。

5. 実習中に大変だった(辛かった)体験の有無(表5)

第2回目調査時に、「今回の実習中に大変だった(辛かった)体験」の有無を質問したところ、66名(80.5%)の学生が「大変だった(辛かった)体験がある」と回答していた。

IV. 考察

1. 研究対象者

本研究は第1回目調査および第2回目調査の回収率が高く、研究対象であったA看護大学2年生を代表する結果が得られた。標本数としては少なく本研究は全国を代表する結果とは言えないが、

基礎看護学実習Ⅱにおけるレジリエンスに関する研究が少ない中、基礎的資料としての役割は大きいと考える。

2. 実習前におけるレジリエンスおよび自尊心

本研究では実習前のレジリエンスとして、自尊心の高低で群分けし分析したところ【二次元総合レジリエンス】および【資質的要因】【獲得的要因】のそれぞれにおいて尺度中央値よりも高い平均値が示された。看護学生を対象とした先行研究ではそれぞれ異なる尺度が用いられているため比較は困難であるが⁶⁾、大学生を対象とし本研究と同じくBRSを用いた先行研究と比較すると、本研究対象者のレジリエンスは高かった。レジリエンスが高かった要因の1つとして調査時期の影響が考えられる。本研究対象者の所属するA看護大学2年生は、前期7月に実習が実施される。大学への入学は(高校からの)「移行」という経験であり「人生における危機」の状態にあるため¹⁹⁾、専門的な科目の学習や慣れない学生生活を経て、1年生から2年生へのステップアップが、高いレジリエンス得点につながっている可能性が考えられる。

自尊心においては尺度中央値よりも低い平均値が示された。本研究はRosenberg(1965)の「Self Esteem Scale」10項目を使用しているが²⁰⁾、Rosenbergは自尊心尺度の作成にあたり、「自信」や「優越感」を意味するような自尊心尺度ではなく、「自己受容」を意味する感情を対象に尺度を作成している¹⁸⁾。よって、実習開始前の時点において自尊心は低い、ストレスからの「回復」や「立ち直り」の力を有していた集団であった。

また、対象集団の標準偏差をみると【獲得的要因】に比べ【資質的要因】のばらつきが大きく、個人の資質の差を十分に考慮していく必要性があることが示唆された。一方、【獲得的要因】のばらつきは5点未満と小さく、個人の資質によらず、困難を乗り越えるために獲得可能な能力について対象集団において大きな差はなかった。看護は人を対象とする専門領域であり、看護専門職として健康問題を解決する力が必要となる。そのため、看護系大学では一般的に1年次に基本教育科目を

履修し、A看護大学においても1年次に基本教育科目として思考力、表現力、人間力を養う科目を履修することとなっている。そのため、履修を通じ【獲得的要因】を構成する「問題解決思考」、「自己理解」、「他者心理の理解」の力が獲得されている可能性が考えられる。一方、大学生期は自己を評価する基準として他者評価を主に用いると述べられていることから²¹⁾、履修を通じその科目の習熟度や学習プロセスに関わらず科目を終了していることにより自己評価が高められてしまっている可能性も考えられる。

自尊心との相関を分析した結果、自尊心が高い群ほど【資質的要因】が高くなる相関関係が認められ、ばらつきの大きかった【資質的要因】には自尊心が影響していることが示唆され、先行研究を補強した⁵⁾¹⁴⁾。自尊心の概念が含まれるセルフエスティームの高い人はあるがままの自分を受け入れ、それを愛することができるため、自分自身の欠点や限界に臆することなく直面することができる、自分を尊重できるのと同時に相手を尊重することができると言われている²²⁾。このことからレジリエンスのみに焦点化するのではなく、自尊心を養うことによりレジリエンスを構成する【資質的要因】を効果的に高め、さらには看護の基本である相手を尊重することのできる人材育成につながるのではないかと推察される。

3. 実習後におけるレジリエンスおよび自尊心の変化

看護学生を対象とし実習前後のレジリエンス変化を検討した先行研究では、調査項目は違うものの実習前と比較し実習後においてレジリエンス得点が増加する傾向が認められている。本研究では実習前後の得点の上昇に大きな差は認められず、統計学的にも有意な差は認められなかったが、本来であればレジリエンスに変化がみられることが予想される。特に、【資質的要因】においては個人の資質の部分であるため、実習前後で変化しにくい可能性があり、【獲得的要因】においては臨地実習での看護過程展開等を通じ、ある程度の変化がみられることが予想され同時に期待され

る。この【獲得的要因】に変化がみられなかった要因として、1つには実習前後のレジリエンスが高かったことが考えられる。一方で、実習前後ともにレジリエンス得点が高いことから、対象集団においてレジリエンスが真に高かったのか危惧され、対象集団に何らかのバイアスが生じレジリエンスが正しく測定されていなかった可能性も考えられる。その理由として、看護学生は看護学実習において強いストレスを認識し³⁾、本研究においても「今回の実習中に大変だった(辛かった)体験」の有無を質問したところ、66名(80.5%)の学生が「大変だった(辛かった)体験がある」と回答していた。もし、実習をストレスや困難な状況と捉えているのであれば、何とか乗り越えようと自身と向き合い努力することによって実習後のレジリエンスが高くなることが予想される。しかし、実習前後に変化がないことは、つまりストレスや困難な状況を乗り越えておらず、何らかの要因によりレジリエンスが高く測定されてしまっている可能性も考えなければならない。特に臨床実習においては患者の生命が優先されるために、実習内容が不十分な学生については、実習指導者や看護師、教員からの指導が入る。そのことにより、ストレスな状況を自身で乗り越えたのではなくサポートによって乗り越え、それを誤った自己評価により自分で乗り越えたと認識しまっている可能性も考えられる。日本は10年以上前から大学全入時代のユニバーサル化に突入し生活やマナーそして学問への態度や学習意欲を必ずしも持ち合わせていない学生もいると言われており¹⁹⁾、近年においては少子化や看護系大学の増設に伴いより一層傾向は高まっていると考えられる。そのような中、主体的な学びの重要性からアクティブラーニングが重視される一方、学習活動を自主性だけに委ね学習成果につながらない恐れも指摘されている²²⁾。それゆえ、主観的評価となるレジリエンスに対しても自己認識や自己評価を十分に行えていない可能性も考えられる。今後、大学生としてまた医療専門職を目指す学生に対し、レジリエンスを高める教育指導的関わりについては模索していく必要がある。

自尊心については、実習前と同様に低く、さらに実習前後における自尊心の平均値には統計学的に有意な差は認められなかった。村松ら(2003)によると、人のセルフエスティームの基礎的部分は児童期までに家庭で形成されるが、学校もまた教育活動を通じてセルフエスティームに影響を与えることができると述べられている²¹⁾。具体的には、①学業の成績にかかわらず、彼らの現実のあり方を認め、受け入れ信頼すること、②学習や生活活動における諸目標、それらの達成のための課題、役割および手順などを選択させ、彼ら自身にこれらの達成責任を持たせること、③課題達成の期待をもって指導することが大切であると述べている。基礎看護学実習Ⅱは、患者の生命が優先される臨床実習である。そのため、時に学習過程にある学生の考えや意見よりも患者の生命を優先させなければならない状況も起こりうる。そのような場合、学生の自尊心を低下させず教育的な関わりを持ちながら安全に臨床での実習指導にあたる必要があり、教員の教育力および実習施設との協力的関係が求められると考えられる。

また、自尊心の高低で群分けしたところ、高い群ほど【資質的要因】が高くなる相関関係が認められ、実習前と同様に【資質的要因】には自尊心が影響していることが示唆され、【資質的要因】を支える重要な基盤となることが推察される。

4. 強みと限界

1) 強み

本研究は、基礎看護学実習Ⅱ前後における看護学生のレジリエンスの変化についてBRSを用いて分析した初めての研究である。それに伴い、教育的な関わりを検討する上で【資質的要因】および【獲得的要因】の視点を考慮する必要性を見出すことができた。また、先行研究においてはレジリエンスと自尊心との相関関係までの分析となっていたが、本研究においては自尊心を「高群」「低群」の2群に分類し層別解析を行い、自尊心の高低を加味してレジリエンスを検討することができた。

2) 限界

本研究はA大学看護学部2年生のみを対象としているため選択バイアスが生じている可能性がありBRSを正しく測定できていない可能性がある。基礎看護学実習Ⅱにおいて個々の学生がどのようなストレスや困難な状況を体験しているのかは不明である。また、横断研究であるため、レジリエンスと自尊心との因果関係までは明らかになっていない。さらに、本研究は実習そのものが対象者である看護学生のレジリエンスの変化にどのように影響しているのかを調査しているため、レジリエンス向上を目指した意図的な教育や指導は行っていない。

5. 課題

本研究の課題として、基礎看護学実習Ⅱにおいて個々の学生がどのようなストレスや困難な状況を体験しているのか、それによりレジリエンスの変化にどのように影響しているのか分析できていない。また、BRSを正しく測定できるのか自己認識や自己評価に関する妥当性や信頼性についての検証を行い、結果を補強していく必要がある。本研究は横断研究であったが、レジリエンスの変化について縦断的な視点から要因検討を行い、看護学生のレジリエンスに関する示唆を得ていくことが求められる。さらに、レジリエンス向上を目指した教育指導的関わりによる変化も検討していく余地がある。

V. 結論

1. 基礎看護学実習Ⅱ実習前後のレジリエンスおよび自尊心において、統計学的に有意な差は認められなかった。
2. 基礎看護学実習Ⅱ実習前後ともに【獲得的要因】に比べ【資質的要因】における得点のばらつきが大きく、個人の資質の差を考慮する必要性が示唆された。
3. 基礎看護学実習Ⅱ実習前後ともに自尊心が高い群において【資質的要因】が高くなる相関関係が認められ、ばらつきの大きかった【資質的要因】には自尊心が影響していることが示唆

された。

VI. 謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

VII. 文献

- 1) 内布敦子, 大湾明美, 小山田恭子, 他「看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～ pp.1-59, 2017.
- 2) 小笹美子, 森岡咲紀, 福岡理英, 他「看護学生の大学生活におけるストレスとサポート」島根大学医学部紀要 第40巻, pp.69-76, 2018.
- 3) 正村啓子, 岩本美江子, 市原清志, 他「臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する日常生活関連要因の検討」山口医学 第52巻, pp.13-21, 2003.
- 4) 毛利貴子, 眞鍋えみ子「臨地実習中の看護学生におけるストレスコーピングと臨地実習自己効力感との関連」京府医大看護紀要 第17巻, pp.66-70, 2008.
- 5) 山岸明子, 寺岡三左子, 吉武幸恵「看護援助実習の受けとめ方とresilience(精神的回復力)及び自尊心との関連」順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 第6巻, pp.1-10, 2010.
- 6) 山崎陸世, 井上葉子, 平山亜矢子, 他「臨地実習における看護学生のレジリエンス育成に関する文献研究」日本看護学会論文集看護教育 第49巻, pp.59-62, 2019.
- 7) Goisis A, Remes H, Barclay K, et al "Advanced Maternal Age and the Risk of Low Birth Weight and Preterm Delivery: A Within-Family Analysis Using Finnish Population Registers" Am. J. Epidemiol. Vol.186, pp.1219-1226, 2017.
- 8) 三宅広美「レジリエンスに着目した大学生のパーソナリティ理解」創価大学大学院紀要 第32巻 pp.355-384, 2010.
- 9) 石井京子「レジリエンスの定義と研究動向」看護研究 第42巻1号: pp.3-14, 2009.
- 10) 大久保麻矢, 杉田理恵子, 藤田佳代子, 他「看護学分野におけるレジリエンス研究の傾向分析—国内研究の動向—」目白大学健康科学研究第5号: pp.53-59, 2012.
- 11) 隅田千絵「看護学実習における学生のレジリエンスについての概念分析」日本医学看護学教育学会誌, 第36巻2号: pp.15-21, 2016.
- 12) 川上あずさ, 池田友美, 藤岡敦子, 他「看護学科学学生のレジリエンスの変化」兵庫大学論集 16号: pp.39-44, 2011.
- 13) 齊藤和貴, 岡安孝弘「大学生のソーシャルスキルと自尊感情がレジリエンスに及ぼす影響」健康心理学研

- 究 第27巻1号：pp.12-19, 2014.
- 14) 福重真美, 森田敏子「看護学生のレジリエンスへの影響要因と教育的支援」応用心理学研究 第39巻1号：pp.19-24, 2013.
 - 15) 平野真理「レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成」パーソナリティ研究 第19巻2号：pp. 94-106, 2010.
 - 16) 平野真理「中高生における二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の妥当性—双生児法による検討」パーソナリティ研究 第20巻1号：pp.50-52, 2011.
 - 17) 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子「認知された自己の諸側面の構造」教育心理学研究 第30巻1号：pp.64-68, 1982.
 - 18) 桜井茂男「ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討」筑波大学発達臨床心理学研究 12号：pp.65-71, 2000.
 - 19) 石倉健二, 高島恭子, 原田奈津子, 他「ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題」長崎国際大学論叢 第8巻：pp.167-177, 2008.
 - 20) 岡田努, 永井徹「青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連」心理学研究 第60巻6号：pp.386-389, 1990.
 - 21) 村松常司, 鎌田美千代, 佐藤治子, 他「セルフエスティームについて」愛知教育大学保健管理センター紀要 第2巻：pp.3-9, 2003.
 - 22) 文部科学省：新しい学習指導要領の考え方. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf (2019年9月29日)

(受付日 2019年9月30日)

(受理日 2019年12月12日)

Abstract

[Objective] In order to obtain suggestions for improving the resilience of nursing students, we will clarify how the training itself affects changes in resilience. As such, we examined changes in resilience among nursing students before and after Basic Nursing Practice II using the Bidimensional Resilience Scale (BRS).

[Method] A self-administered questionnaire survey was conducted before and after the Basic Nursing Practice II practical training, targeted 86 second-year students in nursing department. Data analysis included measuring the average difference between the two groups before and after the training, and the correlation with self-esteem. We also divided high self-esteem groups and low self-esteem groups, and analyzed the correlation.

[Results] The resilience of the study subjects before and after practical training were higher than the scale median [Two-dimensional overall resilience] ($t = -1.519$, $p = 0.133$), [qualitative factors] ($t = -1.834$, $p = 0.070$), [acquisition factors] ($t = -0.304$, $p = 0.762$). No statistically significant difference was observed between the average values of before and after the training.

[Discussion] Resilience scores were high both before and after practical training. It is speculated that resilience is a subjective assessment, so self-awareness and self-assessment may be insufficient. It is necessary to examine what kind of stress and difficult situations each individual student experiences how such situations affect changes in resilience, and to explore factors of education that enhance resilience.

Keywords : Basic Nursing Practice II, nursing students, Resilience